# Common Coed

3

「ですから、この前の温泉宿への旅行でトラブルがあったお詫び、というわけではないんです、このお誘いは」
　と、シャリー・アグレルが一条恵に言った。
　シャリー・アグレルは女子中学生。
　一条恵は女子大生。
　彼女たちは、同じアパートの隣同士の部屋に住む、歳の離れた友人同士という間柄であった。
　恵の方は、とりたてて特記するような経歴も持たないような日本人の学生だが、シャリーの方は、東欧の小国リービッヒの王族であり、留学生である。
　それはさておき。
　二人は一条恵の部屋にいた。
　すなわち、四畳半一間の安アパートの一室に。
「別に私、この前の件はそんなに怒ってるわけじゃないんだけど」
　と、恵は言った。
「恵さんのような人にとっては、ああいう事件はむしろ、望むところだったかもしれませんね」
「別にそういうこともないけど、まあ、すごい嫌だったってことはないわ」
「そうですか。でも、それはそれとして、恵さん。この前の旅行での電車の中で、もっと豪華な旅行がよかったと、おっしゃってませんでした？」
「それはまあ、言ったような覚えもあるわ」
「ですから、今回のお誘いは、それにお応えするのが目的です」
「この前の旅行はそれを満たしてないってわけ？」
「ええ。我がアグレル王家としては、きちんと恩人が満足する旅行をプレゼントしたいんです」
「それが、この、南の島への旅行ってわけか」
　恵は、目の前の畳に広げられたパンフレットを見た。
「南海の楽園、ウービー島へようこそ！」
　と大書されたカラフルなパンフレットだった。
　ポリネシア近海に浮かぶ小さな島で、リゾート地としてもなかなか有名である……と、パンフレットには書いてあった。
　要するにシャリー・アグレルは、恵を南の島への旅行に誘っているのである。
　名目はともかく、実質の目的は間違いなくそれだった。
　実のところ、恵は内心、行ってもいいと思っている。
　シャリーがパンフレットを出した瞬間、内心では小躍りしていたと言ってもよかった。
　が、すぐにはいはいと応じるのは、彼女にとって癪だったのだ。
　シャリーというのは、リービッヒの王族だけあって、なかなかプライドが高い少女だ。そして、これは王族なこととは関係がないが、口が悪く生意気でもある。
　そんな相手だから、ホイホイと「行きます」などと言ってしまったら、名目が招待であるとはいえ、

「あら、恵さん、そんなに行きたいんですか。仕方ないですね、でも、現地では海外慣れした私の言うことをよく聞いて……」
　などというお説教が始まり、主導権は完全にあちらのものになってしまうに決まっている。
　だから、恵は、心にもなく後込みの様子を見せている。
　頼み込まれて仕方なく行ってやる、という体を取りたいのだ。
　シャリーがパンフレットを広げてから、既に三十分が過ぎていた。
「だから、とてもいい場所なんですよ、恵さん。この前のべっこう屋さんみたいに、遊ぶところがないなんてことは全然ないんです。景色のきれいなところはいくらでもあるし、なんなら夜遊びだって……」
　さっきから弁舌を尽くしている。
　彼女はどうしても、恵と一緒にその島に遊びに行きたいようだった。
　恵は、そろそろ勘弁してやっても構わないかと思い、
「……そこまで言うんだったら、一緒に行ってあげないこともないわ」
　と言ってやる。
「本当ですか！」
　シャリーは大声で言った。
　が、すぐに顔を赤らめて、コホンとせきをする。
「……でしたら、招待してさしあげます」

## 2

一週間後。
一条恵とシャリー・アグレルは、機上の人となっていた。
もちろん、乗っているのはウービー島行きの旅客機である。
飛行機に乗ってから、結構な時間が経っている。
「……いい加減、着かないの？」
と、あくびをしながら、恵は、窓際の席に座ったシャリーに言った。
「もうまもなくですよ。ほら、あそこに見えるでしょう」
シャリーが言うのに応じて、恵は身をよじって、窓に体を近づけた。
遙か眼下に、青緑に輝く海と、小さな島が見えた。
「あれがウービー島なわけ？」
「はい」
「きれいじゃない」
「ええ。上から見る分には。それと、私たちが行くようなところは」
「……なにか汚いところがあるっての」
「裏社会の人たちの活動が、なかなかご盛んな島でもあるらしいですよ。なんでも、ちょうど一ヶ月ばかり前に、争っていた二大勢力の内の一方のトップの屋敷が襲撃されて、何十人か死んだとかいう話です」
「着く直前にそんな話するとか、どんな嫌がらせよ。帰りたくなってきた」
「観光地にいる分には平気ですよ。裏社会の人たちにとっても、お金を落とす観光客は大事な収入源ですしね」
ぴこん、と音がし、スチュワーデスの、
「ただいまより、当機は着陸態勢に入ります。お客様はシートベルトを……」
という機内放送が流れた。
間もなくウービー島である。

「すばらしい！」
　緑に輝く海水に足を漬けた瞬間、一条恵は叫んだ。
　彼女とシャリー・アグレルは、ウービー島の白い砂浜へとやってきていた。
　双方とも、シンプルなデザインの水着を身につけている。
　シンプルであるが故に、体のラインがくっきりと浮かび上がる。
　一条恵の肢体は、実にしなやかで無駄がなかった。
　もっともそれは、豊満な胸には恵まれていないということでもあったのだが。
　ともあれ、恵とシャリーは、白い浜で、輝く水と戯れていた。
　本格的に泳ぐ、というよりも、浅い場所でぽちゃぽちゃと遊ぶ、という具合だった。
　もっともそれは、途中までのことである。
　ビーチボールを軽く投げあっている時に、シャリーが聞いた。
「恵さん、水泳の方は、自信があるんですか？」
「自慢だけど、国体に出てもいいとこ行くんじゃないかしら」
「本当ですか？　それでしたら、あそこにある小島まで、行って帰ってこれます？」
　シャリーは、海上のかなり遠くに浮かんだ岩島を指した。
　生身で泳ぐにはかなりの沖合であり、相当な泳ぎの名手でなければ危険といえる距離である。
「ははあ。あんた、私の実力を舐めてるわね」
「恵さんの他のことはともかく、運動能力に関しては認めてますよ」
「んん。怒ればいいんだか、喜べばいいんだか微妙なことをおっしゃる。ま、いいわ」
　恵は、おもむろに泳ぎだした。
　無論、シャリーの指した小島の方へである。
「恵さん！　私はなにも、本当にあんなところまで……」
　彼女の制止に意味はなかった。
　恵は、数十メートルの彼方を泳いでいる。
　数分後、恵の立った姿が、小島の上へと現れた。
　少しかがんで休んだ後、また、水に入る。
　さらに数分。
　恵は、シャリーの元へ戻ってきた。
「どう？」
　と、得意げに言う。
「まあ、この点については流石と言っておきましょう」
「よろしい。ほれ、証拠品」
　恵はそう言って、一本の瓶をシャリーに渡す。
　濃い緑色のビール瓶である。
　本来の蓋はなくなっているが、代わりに、コルクの栓で蓋がされていた。
「小島に落ちていたんですか？」

「うん、そう」
「こんな瓶を見せられたって、あの島に行った証拠になんてなりませんよ。まあ、今回は私、恵さんが行って帰ってくるのを見ていましたから、別に証拠なんか……ん？」
「どしたの」
「この瓶、中になにかが入ってます」
　シャリーは、コルク栓を抜いて、瓶をひっくりかえした。
　一本の紙切れが、中から落ちてくる。
　紙切れはそのまま落下し、海中に落ちかけたが、直前で恵が手を伸ばしてつかみ、それを阻止した。
「なにが書いてあります？」
　そう問われ、恵は、自分が見るより先に、紙切れをシャリーに見せた。
　一つの島の地図だった。
　シャリーは、その島の形状には見覚えがあった。
「この島の地図ですね。……なんだか、印がついている場所があります」
「印？」
「ええ、印です。島のはずれにあるワガンダ山の辺りに、バッテンがつけられています」
「お宝かしら？」
「まさか、そんな。瓶の中の紙切れが宝の地図なんて、いまどき、出来すぎてますよ」
「それもそっか。……でも、気になるなあ」
「なんでしたら、明日、行ってみますか？　お宝は私はどうでもいいですけど、観光がてら」
　二人は、うなずきあった後、浜辺に向かった。
　地図の場所に行くと決めたからには、これ以上、地図を海水で濡らしたくなかったのだ。

浜辺から帰った恵とシャリーは、ホテルで一休みした後、夜の町へ繰り出した。
夕食を食べるためである。
町をぶらついた後、ガイドブックに載っている有名店ではなく、場末のしなびた店へ入った。
「ガイドブックに載るお店なんて偽物よ。地元の人に愛される真の名店は、こういう場所にこそあるんだから」
という、恵の主張によるものだった。
が、注文してからテーブルで待つこと三十分。
店が出してきた定食は、油を使いすぎて魚と固まった油との判別がつかないような揚げ物や、しなびたパンだった。
「これが真の名店料理ですか？」
と、シャリーは恵をなじった。
「じ、地元の人はこういうのを食べてるのよ」
恵はそう言い、料理を口にした。
見た目通りの悲惨な味だった。
が、自分から言い出した手前、完食しないのも決まりが悪い。
苦痛に耐えながら油と魚を口に運ぶ。
シャリーはさっさとあきらめて、一口二口食べた後は、もはや手をつけようとしなかった。
やがて、恵が自らに課した拷問に耐えているのを眺めるのに退屈したのだろう、シャリーはテーブルの隅に投げ捨ててあった、地元の英字新聞を読み始める。
「ウービー島に遺跡の発掘に行った考古学者のドケッチャ教授、予定を四日過ぎても戻らず。大学側は地元警察に捜索願いを出す方針」
と、シャリーは読み上げた。
「この島って遺跡あるの？」
「ここ最近、注目され始めたらしいですよ。古代の海洋民族が住んでいたとかなんとか。観光資源にもなってます」
「へえ。他にニュースはないの？」
「この辺りに関するものは別に……。あ、インドネシアにある国営博物館で盗難事件ですって。ポリネシア古代遺産の人形や古文書が、十点ぐらい盗まれたらしいですよ」
「そういうのってマニアが盗んでるのかしら」
「マニアに転売するために泥棒が盗んだのかもしれませんけれどね」
「なるほど」
「……ところで恵さん。先ほどから、食がお進みになってらっしゃらないようですけど」
「た、食べるわよ、ちゃんと？」
恵はそう言って料理を口に運ぶと、顔をしかめた。

　翌日の昼。
　一条恵の運転するオープンカーが、とある駐車場に停車した。
　駐車場と言っても、無造作な看板が立てられたじゃりの空き地でしかない。
　停車したオープンカーから、一条恵とシャリー・アグレルが降り、歩き始める。
「高いオープンカーなんか、借りる必要なかったんじゃないですか」
　歩きながらシャリーが言った。
「だって南の島よ。照りつける太陽よ。オープンカーでかっこよく行きたいところじゃない」
「そのサングラスとアロハシャツも、『南の島らしさ』ですか？」
「その通り」
　恵は、アロハシャツにサングラスという、日本人観光客の中年男性のようないでたちになっていた。
「まあ、どんなみっともない格好をしようとも恵さんの自由ですけれど。さて、登山口に行きましょうか」
　二人は、昨日に話した通りに、ワガンダ山へとやって来たのだった。
　オープンカーを停めた駐車場は、その登山客用に島の住民が用意したものである。

　山の中は涼しかった。
　あちこちに生い茂った熱帯雨林が日光をさえぎり、山道の大半を影に覆っている。
　あまり急な山ではないので、道自体もなだらかだった。
「この前の温泉地よりも楽な道ね」
「ええ、まあ」
「それに、待っているのは南の島の絶景とお宝」
　ワガンダ山の山頂付近に設けられた休憩所からの眺めは、ウービー島でも随一の風景であると、ガイドブックには書かれていた。
「絶景は確実に到達できるでしょうけど、お宝はどうでしょうか」
「ま、そっちはあわよくばってとこね」
　二人とも、別に宝探しに関してはさほど本気ではなかった。
　あくまでもメインは観光のつもりである。
　しばらく歩いた。
　中腹の休憩所で休み、また少し進んだ。
　ある場所で、突然、恵が歩みを止めた。
　シャリーが、
「どうしたんですか？」
　と聞く。
「私でもまだ大丈夫なのに、恵さんが疲れたってことはありませんよね」
「そりゃそうよ。ただ、この辺りって、地図でバッテンがついてたところじゃない？」
「そう言えば……」
　シャリーは、リュックにしまいこんであった地図を取り出した。
　地図に描かれたワガンダ山は、他の場所に比べて詳細に書き込まれている。
　その、細かく描かれたワガンダ山の、ちょうど中腹の少し上辺りに、×印は記されていた。
「確かに、さっきの休憩所は中腹に作られているはずですから、そこから少し上がったこの辺りが、地図の×に符号するかもしれません」
「でしょ。……ちょっと、道を外れて遺跡を探してみない」
「それって禁止されてますよ、たぶん」
「ちょっとならいいじゃない」
「私みたいな可憐で純粋な美少女を、悪の道に引きずり込まないで下さいよ」
「自分で可憐な美少女って言うなよ」
「本当のことだからいいじゃないですか」
「……んで？　どうすんの」
「まあ、ちょっとだけならいいでしょう」
　二人は、道に張られたロープをまたいで登山道を離れ、木々の生い茂る森の中へと踏み込んで行った。

「迷った」
　一時間ばかり森の中を歩き回ったところで、恵が言った。
「……ええ、さっきから、ずいぶん焦ってらしたようなので、そうなのかなって私も思ってました」
「だったら早く言ってよ」
「恵さんの場合、私が言ったところでなかなか認めないじゃないですか」
「ま、そりゃそうかもしんないけど」
「で、どうします。私みたいなリービッヒ王国の次期女王を行方不明にしたなんていったら、国際問題ですよ」
「あんたが行方不明な時は私も同じじゃない、国際問題になろうが知りようがないからどうでもいいわよ」
「確かに」
「ま、落ち着きが大事よ。とりあえず、あそこに座って休みましょう」
　恵は少し坂を下ったところにある広場を指して言った。
　二人はそろって歩き、広場に到達する。
　いや、正確には到達したのは広場ではなかった。
　並んで広場に一歩足を踏み入れた瞬間に、足下の地面が崩れ、恵とシャリーは地下へと吸い込まれていった――。

「いてっ」
　暗闇の中でしりもちをついた恵が言った。
「……まさか、あんなところに落とし穴がしかけてあるなんてね。どこの悪ガキの仕業かしら」
「地盤が緩んでいたのかもしれませんよ」
　と、闇の中からシャリーの声が聞こえる。
　やがて、懐中電灯の光が、辺りを照らした。
　シャリーが荷物の中から懐中電灯を取り出し、つけたのだ。
「あんた、用意いいわね」
「恵さんよりは」
　懐中電灯の光で照らし出された地下の風景は、きわめて人工的だった。
　四角形に切りそろえられた石のブロックが敷き詰められて、廊下を形成している。
「自然の驚異がこの形を作り出す可能性って何パーセントくらいかな」
　恵が言うと、シャリーが、
「人間が製造する可能性の何億分の一かというところじゃないですか」
「そこまで低いかな？」
「逆にもっと下かもしれませんよ。でも、どちらにせよ……」
「人が作ったって考える方が合理的よね」
　二人は石畳の廊下を歩きだした。

　石畳の廊下をしばらく歩くと、広い部屋へと出た。
　少なくとも、四畳半一間の恵のアパートの倍の面積と高さがある。
「いい部屋じゃない」
　恵が言った。
「ここにお越しになったらどうですか？」
「コンビニが近くにあるなら考えてもいいわ」
　二人はそんなことを言いながら、部屋を横切った。
　部屋の先には、さらに長い、一本道の廊下が続いていた。
　二人は歩き続けた。
　廊下の突き当たりはＴ字路だった。
「どちらに進むべきか、てがかりのない選択ですね」
「まあ、こういう時は勘に……いや、待って」
「どうしたんです」
「なんか聞こえる。ライト消して」
　シャリーは懐中電灯のスイッチを切った。
　男たちの話し声と足音が聞こえる。
「まったく。入り組んだ道だ。地図を用意しておいて正解だった」
「博物館での一仕事は無駄ではありませんでしたな」
「その通りだ。あの仕事で地図を盗みだしておかなければ迷子だった。お前の手並はなかなかだな、レントン」
「我々はくさってもプロです」
　声と足音はだんだんと大きくなってくる。
　つまり、その主たちが近づいてきているのだ。
「隠れましょうか？」
「どこによ」
「それは、ええと……」
「元いた道を少し戻りましょ。ライトは消したままでね」
　恵たちは、Ｕターンして道を戻った。
　そして、地面に伏せ、息を殺す。
　声はいよいよ近づいてくる。
　Ｔ字路の右側の道から、かつかつという足音が聞こえてきた。
　同時に、ライトの光がＴ字路の近辺を照らす。
　恵は目を凝らし、観察する。
　一団の男たちが歩いている。
　中心に、ボス格と思しき、褐色でひげづらのアジア人がいた。
　その横によりそうように、巨大な一人の黒人が歩いている。

　黒人の方は、恵の見た覚えのある人間である。
　以前、シャリーの叔父であるアンジー・アグレルの側近を務めていた男、レントンである。
「あいつ、別の雇い主に鞍替えしたのね」
　恵はつぶやいた。
「こっちに来なけりゃいいけど」
　幸いにして男たちは、恵たちがいるのとは別の方向――つまり、恵たちから見るとＴ字路の左側に当たる方へと歩き去って行った。
　男たちが去った後、暗闇の中で恵たちは沈黙していた。
　が、やがて、恵が先に口を開いた。
「まさか、こんなところで古いお友達に会うとはね」
「あれってやっぱり、私が撃ったレントンさんですよね」
「多分ね。名前も言われてた気がするし」
「どうしましょう」
「レントンが混ざってたってことは、あいつらって悪党よね」
「悪党っていうのも定義が曖昧ですけど」
「なら、あんたのおじさんみたいな奴、でいいわよ。それが悪党」
「じゃあ、その悪党をどうします？」
「もちろんやっつけてやる……と言いたいところだけど、武器もなんにもないし、多勢に無勢だし、やめときましょう」
「と、なると……」
「あいつらが来た方向に行きましょう。多分、そっちは出口に通じてるはずだしね」
「そう考えると、あの人たち、私たちにとっては、出口を教えてくれた救いのヒーローですね」
　シャリーの言葉に、恵は苦笑した。

　恵の当ては外れた。
　男たちの来た方向は、出口に直結はしていなかったのだ。
　入り組んだ迷路が続き、どちらに行けばいいのかすらよく分からない。
　結局は勘だよりでさまようこととなった。
　石の迷路をぐるぐると迷う内に、通路の様子が変わってきた。
　進むにつれ、石にだんだんと苔がむし、苔で染まった緑色の道へとなっていったのだ。
「この辺りの方が古い道なのかしら？」
「水気が多いのかもしれませんよ、こっちの方が」
　そんなことを言いながら歩く内に、広いホールへと出た。
　天井までの高さは三十メートルを越え、左右の辺に至っては一辺六十メートルは下らない。
　が、そのホールでもっとも印象的だったのは、広さではなく、『水』だった。
　大きな一本の地下水路が、ホールのちょうど中央を横切っていた。
　ホールには、恵たちの来た通路以外に道はない。
　行き止まりだった。
　もっとも、それは陸路に限った話である。
　水路を通れば、別の場所に出ることも出来るだろう。
　恵たちは、ホールの中央まで歩いてみた。
　水路は静かに流れている。
「ここ、泳げないかな？」
　恵が言った。
「私、恵さんのようには泳げませんよ。それに、どこまで続くか分からないし」
「確かに。船かなにかがいるわね」
　もちろん、そんなものはこのホールには見あたらなかった。
　恵たちは、水路のほとりに座り込んで休憩した。
　石の廊下を歩き回ってさすがに疲れていたのである。
　休んでいると、恵たちのやって来た通路の方から、足音が聞こえてくる。
「あいつらかな？」
　恵は立ち上がった。
　あの、通路で見かけた悪党どもがこのホールにやって来るということは、別にありえないことでもなんでもない。
　同じ素手であっても、座り込んで出迎えるよりは立って出迎える方が幾分ましである。
　やがて、足音の主がホールに現れた。
　一人の褐色の老人が、息を切らせてホールに走り込んでくる。
　恵は、
「あんた何者？」
　と聞いた。

　老人は恵たちの姿を見て、驚き嘆き、
「ああ！　こんなところにもバルシャーの一味が待ちかまえていようとは！　我が命運もここまでであろうか」
「バルシャーの一味？　なんのこと？」
「とぼけてもだまされんぞ。お前らは大方、逃げたわしを連れ戻すためにバルシャー・ジンが派遣した女殺し屋であろうが」
「落ち着いて。私たちはそのバルシャーとやらには関係ないわ。ただの旅行者よ」
「バカなことを。こんなところにただの旅行者がやって来るわけがない」
「確かに、普通はそう思いますね」
　と、言ったのはシャリーである。
「それ見ろ、それ見ろ！　見ておれよ小娘ども、このわしとて最後に一矢報いてやるぞ！」
　老人はそう言うと、恵に向かって殴りかかってくる。
　よたよたとした動きだった。
　恵は軽くかわした後、老人の首筋をすとんと打ち、気絶させた。
「眠って頭を冷やしてよ、おじいちゃん」

「うーむ……」
　しばらく経ち、老人は目覚めた。
「あ、気がついた？」
「うぬ……わしは」
「ここにいる一条恵さんに叩きのめされたんですよ」
「そうか……そして、お前さんがたは、わしをバルシャーに突き出すんじゃな」
「だから、そんなことしないって」
「なに？　してみると、あんたらはバルシャーの手下ではないというのか」
「最初からそう言ってるでしょ。そもそもバルシャーって誰なのよ」
「むむむん。どうやら本当に知らんようだな。だったらよろしい、わしが教えてしんぜよう」
　老人は話し出した。
「バルシャー・ジンというのは、まあ、この島の悪党どもの元締めと思ってもらえれば話が早い。ウービー島のカポネと呼ばれている男だ。いい評判と遵法精神以外のものは大抵持ってる。が、人間の欲というものは限りがないものだ。奴はそれだけでは満足できなくなった」
「今持ってるのよりも、もっとたくさんのお金が欲しくなった、とかですか？」
「その通りだ、金髪の嬢ちゃん。バルシャーは、てっとりばやく財産を増やしたくなったのさ」
「それが、この遺跡のお宝？」
　恵が聞いた。
「そうだ。ウービー島には、有史以前に存在した黄金の古代王国の伝説がある。バルシャーは、ウービー島に眠るという、古代王国の遺産を手に入れようと考えた」
「いい大人が、そんなおとぎ話を本気にするでしょうか？」

　と、シャリーが言った。
「もちろんバルシャーだって、おとぎ話だと考えている内は、なんの興味も持たなかった。だが、そうでなくなってからは別だ」
「なに？　実在が立証されでもしたの？」
「うむ。近年になって、ある極めて偉大な考古学者の研究によって、ウービー島の古代遺跡の実在が、ほぼ証明されたのだ。材料の少なさ故に、学会ではまだろくすっぽ注目されてはいないが、しかし、間違いなくこの偉大な研究成果は考古学雑誌に掲載され、一部の心ある学者の間では強い関心を持たれ……」
「……その偉大な考古学者ってのがあんたなわけね」
　恵はためいき混じりに言った。
「言わずともよく分かったな」
「分からいでか」
「とにかくだ、このアンブー・ドケッチャ教授の大発見は、一応は世間に公表されたわけだ」
「バルシャー・ジンさんは、それに目をつけたわけですね」
「左様。発掘のためにウービー島に降り立ったわしをとっ捕まえ、自らの私利私欲のための遺跡探査にむりやり協力させたのだ。遺跡の入り口の場所を割り出させたりな」
「ご苦労なさったんですね」
「……まあ、奴の部下のおかげで、合法的には入手できなかった、インドネシアの博物館の古代文書を手に入れられたので、そのおかげでわしの研究も進んだのは確か――いや、これはまあいい。とにかく、バルシャーは、わしの知識を利用して古代遺跡の黄金を手に入れようとしている悪党なのだよ」
「なるほど。でも、なんであんた、いまさらそいつらから逃げてきたの」
「隙が出来たのが洞窟に来てからだっただけだ。それ以前は、常に見張られ通しの毎日だったからな。まっ暗い遺跡の中なら、照明の範囲からさえ逃げられれば、逃げきれる可能性はずっと増す」
「で、逃げる内にこのホールにやってきたと」
「そういうことだ」
「なるほどね。……じゃあ、あんた、そのバルシャーたちと一緒にこの遺跡に入ってきたわけよね？」
「左様」
「だったら、出口の場所も分かる？」
「ここからだと分からん。わしは、バルシャーからめくらめっぽう逃げるうちに、ここにたどり着いただけじゃぞ」
「なんだ、じゃあ役に立たないじゃん。行こうか、シャリー」
　恵は立ち上がった。
「恵さん、それはひどいんじゃないですか」
「そうじゃ、そうじゃ。こんなかよわい年寄りを、こんな場所に置き去りにするな」
「……冗談よ。とはいえ、じいさんが出口への道を知らないとなると、また、山勘頼りで進むし

かないなあ」

「ドケッチャは見つかったのか？」
　バルシャー・ジンは、傍らにいる黒人、レントンに言った。
　彼らは、廊下の行き止まりにある、石造りの扉の前に立っていた。
　扉は堅く閉ざされ、開く様子を一向に見せない。
「いえ。部下を動員し、探させてはおりますが」
　レントンが答えた。
「ここの通路は完全に迷路そのものだ、簡単には見つかるまい。とはいえ、奴は必ずや見つけねばならん。古代ウービー朝の暗号を解読し、この扉を開けられる男は、地球上に奴だけなのだから」
「存じております」
「徹底した捜索を命じろ。同時に銃器も使わせるな。死なれては元も子もない」
「たかがおいぼれ一人。火器など使わずともたやすく捕らえられましょう」

　恵たちはふたたび、石の廊下をさまよった。
　既に通った道であるかどうかすら、分からなくなってきている。
　歩き回る内に、懐中電灯のライトが切れた。
「げ」
「電池切れですね」
「おじいちゃん、電池とか持ってないの？」
「命からがら逃げ出してきたんじゃ、そんなもんあるかい」
「参ったな」
　人工の光がなくなれば、もはや完全な暗闇である。
「手探りで進みますか？」
　シャリーが言った。
「本当ならそれしかないと思うけど……」
　通路の遙か先に、一筋の光が見えた。
　光は、動いている。
「あの光って、なんじゃろか」
「こんなところで動いてる光なんて、そりゃまあ、懐中電灯か電気カンテラでも持った奴が歩いてるって考えるのが一番合理的じゃない？」
「なんと。つまり、バルシャーの手のものがとうとうこの近くまで来ちまったということかい」
　アンブー老人は絶望的な声を出した。
「予備の懐中電灯がやってきてくれたって思いなさい。私に任せて」
　恵はそう言うと、息を殺し、足音を忍ばせながら、光の方へと近づいた。
　近づく内に、光の発生源はカンテラであり、それを持っているのがやや腹の突き出た中年男性であることが分かる。
　恵は、カンテラの光によって自分の影が生じないぎりぎりまで近づいた。
　そして、タイミングを見計らい、闇から飛び出、男に襲いかかる。
　首を絞めあげた。
　男はきゅうと気絶し、カンテラを落とす。
　恵はそれを拾い、シャリーとアンブー老人が待つ方へと戻った。
「そういうわけで、私たちの手元にこうして光が戻ってきたってわけよ」
　恵は、二人の前にカンテラを掲げ上げて言った。
「こういうことだけはお上手ですね」
　シャリーが言った。
「まったくじゃ。盗人の才能があるぞ」
　アンブーが続けた。
「ひどいご賞賛をいただいてどーも」
　と、恵は返した。

　カンテラを照らして歩く内に、明るい通路へと出た。
　通路のあちこちに、蛍光ライトが据え付けられ、石畳を照らしだしている。
「誰かがこのライトをつけたんでしょうか」
「バルシャー・ジンって奴じゃないの？」
　シャリーが聞き、恵が答えた。
　さらに、別の声によって回答が追加される。
「ご名答だ、姉ちゃんたち」
　恵たちは、声の方を振り向く。
　声の主は、マシンガンを構えた三人の男だった。
　恵たちにとっては、見覚えのある顔だった。
「あら、ジェマシーさんじゃない。それと、名前は分からないけど手下の二人」
　ジェマシー・ガンダン。
　かつて、シャリーの命が叔父のアンジー・アグレルという男に狙われた事件において、恵たちと戦った男である。
　あの時も今もここにいるということは、おそらく彼らは、例の黒人レントンの部下であり、今はバルシャー・ジンのために働いているのだろう。
「残りの二人は、ジム・ベンドンにヤルー・ボルドンってんだ。ヤセがジムでデブがヤルーだ。覚えてあの世に持っていってやってくれや」
「あの世に行くかどうかともかく、覚えておけるようには努力するわ」
「残念ながら、この状況で生き残れると思うのか？　てめえらを撃たない理由がないんだぜ」
　ジェマシーがそう言うと、横にいた男の内の片方、デブのヤルーが口を挟んだ。
「ジェマシー、そりゃまずいよ。あのじいさんを取り戻すには銃器は使うなって命令なんだぜ」
「じいさんさえ殺さなきゃ、どうだっていいだろう」
「でもよ」
「うるせえ！　ごちゃごちゃ言ってるんじゃねえ、俺のやることにイチイチ口を挟みやがるなら、てめえのドタマからぶっとばしてやるぜ」
　と、いきりたったジェマシーは、ヤルーに向けて銃を向けた。
　その一瞬の隙をつき、恵は、持っていたバッグを、ジェマシーの顔面めがけて投げつける。
　猛烈な勢いで飛来したバッグは、ジェマシーの頭に見事に命中する。
　ジェマシーは「ぐおっ」という声と共に、マシンガンを取り落とす。
　それと同時に、恵がバッグを投げるのにあわせてジェマシーたちに接近していたシャリーが、ジェマシーの落としたマシンガンを拾った。
　そして、三人にマシンガンを向ける。
「動かないでくださいね」
「……くそっ。ヤルー。てめえのせいだぞ」
　ジェマシーは悪態をつきながら、両手を上げた。

　残りの二人もそれに続く。
「さて。なにから聞こうかな……とりあえず、ここの電気はなんなの？」
　恵が言った。
「バルシャーの旦那が、遺跡のところどころに作らせた休憩所だよ。いくらライト持ちと言っても、どこもかしこも真っ暗闇じゃあ、旦那も部下も気が持たねえし、目印代わりにところどころに作ってる」
「なるほど。じゃあ、あんたら三人は、この休憩所のお留守番役って感じかな？」
「その通りだ。あと、レシーバーで、そこのドケッチャのじいさんを見つけたらふん捕まえろって命令も仰せつかってたな」
「じゃ、最後の質問。どうすればここから出られるかって分かるかしら？」
「なんだ。お前ら、ここに宝探しに来たんじゃないのか？」
「私たちは、森の探検中にここに迷い込んじゃっただけよ。早く帰りたいの」
「……もし、旦那が入ってきたルートを使って外に出る気なら、やめておきな」
「なんでよ？」
「入り口は警戒が恐ろしく厳重なんだ。遺跡から出た瞬間に、据え付け式のガトリングを喰らって、お前らは跡形も残らんぜ」
「そうそう、バルシャーの奴、遺跡に他の人間が入ってくるのを嫌ってか、やたら重装備の連中を、遺跡の入り口に配置しておったな」
　アンブーが言った。
「参ったな。それだと、脱出できないじゃない」
「この人を人質にしたらどうですか？　盾にして進むんです」
「俺みたいな下っ端なんか人質になるかよ、一緒に撃たれておしめえだ」
「そりゃそうよね」
「盾にするなら、それこそバルシャーの旦那本人にでもするしかねえな」
　ジェマシーは笑った。
「ナイスアイディア。そうするわ」
　と、恵は言った。
「おいおい。そりゃ、遺跡の中だからガトリング並の重装備とは言わねえが、バルシャーの旦那はそれなりの人数、ここに連れてきてるんだぜ」
「ガトリングよりマシならそれでいいわ。バルシャーを探す。……じゃ、おやすみ」
　恵はジェマシーが腰に持っていた拳銃を奪うと、その銃底で頭を殴った。続いて、残りの二人、ジム・ベンドンとヤルー・ボルドンも。
　三人は倒れる。
　恵は残りの二人からも拳銃を奪い、シャリーとアンブーにそれぞれ渡した。
「わしはドンパチなんぞはろくに出来んぞ」
「持ってないよりゃマシでしょ。いざとなったらそれで殴ればいいわよ……今みたいにね」
　恵はシャリーからマシンガンを受け取り、それを構えると歩きだした。

　また、石の通路をさまよう。
　やがて、二つに別れた道へとやってきた。
　恵は、右側の通路を覗き見、シャリーとアンブーは、左側の通路を覗き見る。
　どちらも完全な暗黒である。
「こんなんでどっちかを選べってのが、無茶なのよね」
　と、恵が言った。
「ま、バラバラに行動する意味もないから、とりあえずどっちかに固まって……」
　恵はそう言い、シャリーたちのいる方に一歩を踏み出した。
　が、その一歩で石畳のうちの一つを踏んだ途端に、がたがたという音がし、部屋全体が揺れ出す。
　部屋はぐらり、ぐらりと、立っていられないほどの大揺れをし、やがて、天井の石が崩れ始めた。
　恵は叫ぶ。
「通路に逃げて！」
　そう言いながら、彼女は自分も言ったとおりにした。
　すなわち、もっとも近くにあった脱出口――右側の通路へと飛び込んだのだった。
　恵は、闇の中でため息をついた。
　カンテラを持っていたのはアンブーだったので、彼女の側には光がなくなっていた。
　とはいえ恵は、それ以上に、シャリーとアンブーの安否が気になった。
「あの二人、ちゃんと通路に飛び込んでくれてればいいけど」

　シャリー・アグレルとアンブー・ドケッチャは、石畳の上で呆然としている。
　恵の叫び声のままに、左の通路に飛び込んで、なんとか部屋の崩落からは逃れられたものの、彼女とは別れ別れになってしまっている。
　幸いにもカンテラは無事で、光は未だ手元にある。
　しかし、決して安泰な状況ではない
「恵さんがいないとなると、バルシャーさんの部下に会った時にまずいことになりますよ」
　シャリーが言った。
「あんたは、あのお姉ちゃんほど強くはないのかい」
　シャリーはうなずく。
「でも、進みましょう。ここにいたって、どうしようもないんですから」
　二人はカンテラの灯りを頼りに歩いた。
　長い長い一本の廊下が、延々と続いている。
　その内、向こう側から、一個の光が近づいてくることに、二人は気づいた。
　十中八九、バルシャーの部下である。
「ど、どうするね？」
「先手必勝です」
　シャリーは拳銃を抜いた。
　そして、アンブーにカンテラを消させた。
　光はだんだんと近づいてくる。
　やがて、光の主の姿がうっすらと見えるほどの距離になった。
　あちらの光源もカンテラであり、それを持つ人間の体は驚くほど大きい。
　シャリーはそれに向かって引き金を引いた。
　狙いがわずかにそれる。
　光の主はカンテラを地面に落とし、シャリーに向かって走ってくる。
　シャリーは一瞬、面食らう。
　その間に、光の主はシャリーの眼前まで接近する。
　光の主は、レントンだった。
　巨大な黒人である。
　レントンは、シャリーが撃つよりも早く、そのみぞおちを殴った。
「あうっ……」
　シャリーはうめき、銃を取り落とした。
　気が遠くなっていく。

一条恵は闇の中を転びながら進んだ。
もはや手探りで前進する以外の道はない。
幸いにして、彼女はついていた。
しばらくさまよう内に、ライトに照らされた明るい空間が、通路の先に見えてきたのである。
（バルシャーの作らせたって休憩所ね）
と、恵は思った。
恵は銃を構え、
「動くな！」
と叫びながら光の中へと足を踏み入れた。
中では、二人の男がトランプをしていた。
男たちはすぐさま手を上げる。
恵は、片方の男に、もう片方の男を縛り上げるように命じた。
男はその通りにする。
恵は、結び目を確認したあと、もう一人の男も縛った。
「ここにはもう、他の人間はいない？」
男たちはうなずく。
恵は休憩所に置いてあった豆の缶詰を腹に入れた後、ヘッドライトを頭につけた。
豆の缶詰は昨夜の夕食よりはだいぶ美味だった。
さらに休憩所をあさり、一束のダイナマイトが入ったバックパックとライターを見つけた。
「使えそうね」
恵は言い、バックパックをかついだ。

「アンブー・ドケッチャ。互いに無駄な運動をしたな」
　バルシャー・ジンが、アンブーに言った。
　シャリー・アグレルとアンブー・ドケッチャは、レントンに囚われてバルシャー・ジンの虜となり、その眼前に引き出されていた。
「もっとも必要な時にいなくなるとは困った男だ。……さて」
　バルシャーはアンブーの腕をつかみ、共に歩いた。
　そして、石造りの扉の前に老人を放り出す。
「この扉を開けてもらおうか」
「わしはそういう脅しには……」
　レントンが銃を構えた。
「屈するよ。今、開ける」
　アンブーは扉をいじりだした。
「情けない人」
　シャリーは言った。
　そして、一条恵へと思いを馳せる。

一条恵は、ヘッドライトで照らされた石廊を歩いていた。
道はもはや、それほどは入り組んでいない。
ときに分岐し、ときに行き止まりに行き当たることもあるが、しかし、これまでのような複雑怪奇な錯綜ではなかった。
「シャリーたちの方もこの調子なら、もしかしたら、意外とすぐに会えるかも」
恵はつぶやいた。
やがて彼女は、直角に曲がる角へとさしかかった。
角の向こうから一本の光が、足音と共に近づいてくる。
バルシャーの一味か、あるいはシャリーたちなのかは、もちろんまだ判別しかねる。
そうなると、どちらであってもいいように対応するしかない。
恵は、ヘッドライトを消し、足音を殺しつつも角のところに走り込んだ。
角に身を隠し、頭を出して通路の向こうを見る。
カンテラを持った男が近づいてきている。
恵は、頭をひっこめて待った。
やがて、男の足音が極限まで近づいた瞬間、恵は飛び出し、男にストレートを喰らわせた。
のびた男に向かって、
「ぶっぱなさなかったことをありがたく思ってね」
と言った。
また、歩いた。
通路の先に光が見えてくる。
さっきのようなかぼそい光ではない。
複数のカンテラやライトによって構成される、かなり明るい光だった。
（休憩所かな？）
と思いつつ、恵は、闇の中から光の中を観察した。
何人もの男がいた。
例のバルシャー・ジンとレントンもその中にいる。
男たちは、石の扉を前にしていた。
その石の扉の前に、アンブー・ドケッチャ教授がかがみ、扉の前に据え付けられた石盤に手を当てている。
その近くに、シャリー・アグレルもいた。
「あちゃー」
恵は小声でつぶやいた。
シャリーたちは、バルシャー・ジンに捕まってしまっていたのだ。
「どうしようかな」
恵は自問した。
もし、シャリーやアンブーがいないなら、マシンガンを乱射しながら突撃するのもあるいは上

策かもしれない。
　しかし、現にそうでない以上、彼女たちを殺すわけにはいかない。
　恵がどうしたものか考えている内に、石の扉がごご、と音を立て、開いた。
「でかした、ドケッチャ」
　と、バルシャー・ジンが言った。
　そして、手近にいた部下に、
「先行しろ。慎重に動け」
　と言った。
　言われた部下は、ライトを持って扉の中へと入っていく。
　しばらくの時間が経った。
　やがて、扉の向こうから、
「問題ありません。……ボスのお求めのものがあります」
　と、声がした。
　先行させられた部下の声であろう。
　バルシャーはうなずくと、
「よし。俺たちも入る」
　と言い、扉をくぐった。
　続いてレントンがくぐり、バルシャーの部下たちは次々と後に続いた。
　最後に残されたのは、バルシャーたちのさまを暗がりから眺めていた、一条恵ただ一人だった。
　誰もいなくなったのを確認してから、恵は、ライトを消して、扉のそばまで歩いた。
　そして、扉からそっと頭を出し、中の様子を見る。

　光輝く黄金の宮殿があった。

「古代国家の王族どもが、手間暇かけて隠しだてしただけのことはある！」
　バルシャーの声が、黄金宮の中に響いた。
「確かに、たいしたものですな」
　レントンが言った。
　が、それに続けて、
「しかし、部下どもは放っておいてよいのですか？」
　ともつけ加えた。
　バルシャーの部下たちは、そこらじゅうに散乱した黄金の塊に気を取られ、黄金宮中に散乱してしまっていた。
　中には、黄金を切り取って自分の懐に入れている男までいた。
「元々、俺の金のおこぼれをもらうためについて来ているような男たちだ。黄金を目の前にすればこうもなる」
「では、かまわないと？」
「馬の目の前につり下げた人参も、たまには食わせてやらねばな」
　バルシャーはそう言い、歩いた。
　レントンも続く。
　必然、彼に後ろ首をつかまれているシャリーとアンブーも、共に移動することになる。
　運ばれながらも、シャリーは言った。
「バルシャーさん、どちらに行かれるんですか？」
「君は王族だったか？」
「はい。リービッヒの」
「この宮殿の中枢だよ、お姫様」
「中枢？」
「もっとも価値ある宝の眠る場所だ」
　一同はやがて、黄金の扉の前にたどり着いた。
　バルシャーが扉を押す。
　黄金の扉がぎいと開く。
　扉の向こうに、他より一層、輝く部屋が現れた。
　その中央に、高さ五メートルはあろうかという、一体の像がある。
　一糸まとわぬ女性の像である。
「ウービー古代王朝が信仰していた女神の像だ」
　アンブーが誰にいうともなく言った。
「これがあなたの一番欲しかったものですか」
「そうなるな」
「私としては、ミロのヴィーナスの方が好みです」
「俺は別に美術的興味のために、この像が……いや、黄金宮が欲しいわけではない。黄金宮自体

が持つ価値と、それが生み出す金のため……」
　そこで、銃声が鳴り、バルシャーの声を遮った。
　マシンガンの発射音である。
　バルシャー、レントン、シャリー、アンブーの四人が、一斉に音の方を振り向く。
　マシンガンを構えた日本人の女が、そこにいた。
　一条恵である。
「手下を好きなように遊ばせすぎたんじゃない？　簡単にここまで来れたわよ」
「お前が、レントンやシャリー姫様が言っていた女か」
「ええ、一条恵。はじめまして、バルシャー・ジンさん」
「そのマシンガンで俺を始末する気かな？」
「場合によってはね」
「人質ごとか？」
「そうはならないわ」
　爆音がした。
　同時に、床が揺れる。
「なんだ？」
　また、爆音と振動。
　予期せぬ揺れに、バルシャーとレントンは態勢を崩す。
　必然、レントンが捕まえていたシャリーとアンブーは解放される。
　腰を抜かすアンブーの手を引いて、シャリーは恵のいる方へと走った。
　やがて、揺れが収まる。
「今の揺れは？」
　恵の隣までやってきて、シャリーが聞いた。
「この部屋の周りに、ダイナマイトを仕掛けたの。思ったより上手く行ったわ。……さて」
　恵は、マシンガンの銃口を動かした。
「バルシャーさん、一緒に来てもらいましょうか？」
「……くそっ」
　バルシャーは唇を噛んだ。
　が、そこでまた、振動が一同を襲った。
「恵さん、まだ仕掛けてたんですか？」
「わ、私じゃないわよ！」
「恐らくこの部屋は、黄金宮を支える柱だったんじゃ。そこに爆薬でショックを与えたもんだから……」
「崩れそうっていうわけね」
　アンブーがうなずく。
　振動は、延々と続く。
　恵たちは、もはや物も言わない。

一斉に、出口に向かって走り出す。
バルシャーやレントンの場合も、事情は同じようだった。
「崩れるぞ！　死にたくない奴は逃げろ！」
と叫びながら、出口に向かって駆ける。
部下たちはパニックを起こし、誰もが出口に向かって走り出した。
数分が経った。
黄金宮にいた者全員が、かつてその入り口であった石門にいた。
恵とバルシャー・ジンは、隣あって座りこんでいる。
どちらも肩で息をしている。
「貴様のおかげでビジネスが台無しだ」
「別に邪魔したかったわけじゃないわ」
「だろうな」
「そういうこと。だから、そろそろ帰るわ」
恵はマシンガンをバルシャーに向けた。
「俺を人質にするか」
「そういうこと。あんたを盾にして、町まで帰らせてもらうから」
バルシャー・ジンは笑った。

　親玉のバルシャーを人質にしたおかげで、恵たちは攻撃されることも、道に迷うこともなく、遺跡を抜けることができた。
　バルシャーは、恵たちが崩したのとは別の道を知っていたのだ。
　部下たちに遺跡の入り口で待っているように命じて、バルシャーと共に山を降りた。
　マシンガンは途中で捨て、タオルでくるんだ拳銃を、バルシャーの背中に突きつけた。
　やがて、ワガンダ山の登山口にたどり着く。
　レンタルのオープンカーの停めてある駐車場まで歩いた。
　そこで、バルシャーに言った。
「悪いけど、お金くれない？」
「どうしてだ？」
「あんた、この後、山に帰るでしょ。そしたら、部下と一緒に私たちを殺しにくるわけじゃない。そんなのごめんだから、私とシャリーとアンブーじいさんは、飛行機でさっさとこの島をおさらばすることにするわ」
「なるほどな」
　バルシャーは苦笑して、
「なら、俺の尻ポケットの財布をくれてやる」
　と言った。
　確かめてみると、財布にはかなりの額の紙幣が入っていた。
「帰りの飛行機代には多すぎるが、残りは小遣いにでもすることだ。……しかし、もったいないな」
「なにがよ？」
「俺はお前らを襲うつもりなどない。遺跡がなくなった以上、もはや俺の利益にも邪魔にもならん。だから襲う理由などなくなったのさ」
「信じにくいわね」
「なら、それもいいさ。……では、部下たちのところに戻ってもいいかな」
「どうぞ」
　バルシャーは振り向き、去っていった。

　恵たちはアンブー・ドケッチャを空港まで送った。
　バルシャーの財布の金から三分の一を渡して、車から降ろす。
「このまま祖国に帰られるんですか？」
　別れ際にシャリーがドケッチャに聞いた。
「当然だ。国まで帰れば、バルシャーもわしなんぞに興味はなくすだろうさ」
「ウービー島の遺跡の研究はどうすんのよ」
「もうこの研究はやめだ。どのみち、遺跡のメインディッシュはお前さんがたに壊されちまったことだし」
　アンブーはそう言うと、足早に去っていく。
　一刻も早く、この島から離れたいようだった。
　それを見送りながら、シャリーが言った。
「で、どうしましょう？」
「……どうせなら、ツアーの日程が終わるまでは遊んでいこうか？」
「それって度胸がいいというより無謀ですよ」
「あんたが怖いなら、私たちもすぐ帰ろう」
「べ、別に、そういうわけじゃないです」
「じゃ、決まりね」
　恵はオープンカーを発進させた。
　――とりあえず、レンタカーを返して、ホテルに戻って……今夜こそ、『まともなウービー料理』だ。
　そう思っていた。

　数日後。
　恵とシャリーは、ウービー島空港の出発待ちのロビーにいた。
　あと二十分で、搭乗手続きが開始される。
「結局、予定の大半を消化できましたね」
　シャリーが言った。
「そういうこと。二日目にちょっとしたトラブルがあった分だけ観光地を見回る数は減ったけど、まあ、主だったところは見れたし、一応は満足ってとこね」
「このまま飛行機に乗れれば、ですけどね」
「大丈夫だって。ここまで襲ってこなかった以上、あいつらだって、なにも空港に来てまで騒ぎを起こそうとしないわよ」
　恵がそこまで言ったところで、ロビーがざわつきだした。
　一人の男が、人垣を分けて悠々と歩いてくる。
　バルシャー・ジンだった。
　背後にレントンを連れている。
「あら、バルシャーさん」
　恵は言った。
「お嬢様方が今日お帰りだと聞いたのでな」
　バルシャーはたばこを取り出し、火をつけた。
「で、なにしに来たの？」
「見送りだ」
　バルシャーはレントンに「出してくれ」と命じた。
　レントンはうなずき、持っていたトランクから手のひら大の金片を取り出した。
　そして、恵に投げてよこす。
「なによこれ」
「あの遺跡から持ち帰ったものだ。俺の部下の運のいい奴が、ポケットに入れていた。そいつがあの件での唯一の収穫さ」
「なんで私に」
「勝った奴が持つべきものだと思っただけだ。売るなり記念にとっておくなり、好きにしろ」
　バルシャーはそれだけ言うと、また人垣を分けて、悠々と歩き去った。
「どうするんです、それ？」
　と、シャリーが恵に聞いた。
「今のところはとっておくわ」
「仕送りを使い果たしたら？」
「質屋行き」
　恵は金片をバッグにしまった。

「本当に追わずともいいのですか？」
　空港のロビーから出たところで、レントンがバルシャーに聞いた。
「今後、あの女が俺の邪魔になるようなことはないさ、多分な。それに、邪魔になったらなったでいい」
「気に入ったのですかな」
　レントンの声に、この男には珍しく表情があった。
　多少、楽しげである。
「そういうことだ。今週末の密貿易の現場にでも踏み込んでくれんかな」
「楽しみになさっているといい。……では、私はそろそろ」
「貴様も次の雇い仕事が待っているか。機会があればまた呼ぶ」
　レントンは一礼をした。
　飛行機の音が鳴った。

　こうして、一条恵とシャリー・アグレルの、ウービー島への旅行は終わった。
　金片は、今のところは、恵の部屋のテレビの上に置かれたままである。